

鹿児島県指定無形文化財 「天吹（てんぷく）」

鹿児島だけに伝わる小さな縦笛「天吹」をご存知でしょうか。コサンダケ（正式名 布袋竹）で作られた約30cmの縦笛に、果たしてどんな物語があるのでしょうか。



去る11月12日鹿児島市で催された天吹同好会の記念会に出かけました。天吹の解説と吹奏、尺八との比較とその吹奏、そして薩摩琵琶の弾奏と普段聞くことのない機会を得られて充実した一日となりました。

閑話休題、天吹とは一体如何なるものか？その説明を天吹同好会会長白尾先生の挨拶から一部引用させていただきます。

「天吹奏者は、天吹を作るのにふさわしい竹を探すために、秋の深まるのを待って山に竹切に行きます。素朴な楽器ですので極端に言えば、穴をあけ歌口を作るだけで、他に人為的な細工はほとんどしません。その音色の良否は、まったく材料の竹にかかっています。奏者は山に埋もれ生えている竹本来の性質を引き出し伝える役割を果たすばかりです。

一方、天吹には物語があります。日新公(島津忠良)が奨励され、庄内の乱で戦死した平田と吉田の義兄弟が愛好し、関が原で徳川方を感動させ、幕末御花畑屋敷で作られ、滅亡の危機にあったものの、奇跡的に一人から一人へと受け継がれて現代まで伝承されました。この自然と物語が鹿児島を舞台としており、他に類がないということが、天吹が鹿児島独特の楽器であり、鹿児島の文化の体現者である所以です。」

座・閑話

有朋自遠方来「朋、遠方より来たる有り」

実際遠方より友が訪ねてきたわけではないが、毎年秋になると山形県鶴岡市の友人より庄内柿が届く。まるで友人が来訪するかのように待ち遠しくしている自分がある。

庄内柿は、山形庄内地方の名産だが鹿児島ではあまり知られていないような気がする。平核無（ひらたねなし）という品種で、読んで字の如く平たくて種のない渋柿を100度のアルコールで渋抜きするそうだ。見た目も美しく程よく柔らかく上品な甘さが人気かもしれない。

今年は天候不良で、米同様出来は良くなかったそうだが、柿農家でもない友人が自ら作って送ってくれたことが何よりも不亦楽乎 「また楽しからずや」

(論語 学而編 「有朋自遠方来不亦楽乎」は、中3で学習します)

第2回 英語検定の結果(合格者数) 10/2 実施

準2級	1人	3級	1人
4級	5人	5級	受験者なし

第3回英語検定は1月20日に実施予定です。

※2次面接試験の指導もしています。(国分・隼人教育ゼミナールは、準会場登録団体です。)

漢字検定の結果(合格者数 2回合計) 第1回 6/24 第2回 10/28 実施

準2級	1人	3級	5人	4級	5人
5級	5人	6級	1人	7級	1人

(国分・隼人教育ゼミナールは、認定準会場です。)

“ジャンプ賞” 飛躍的に成績が伸びた生徒が対象

中学校	入塾時の順位	2学期のジャンプ賞
舞鶴中3年 Aくん	27位	2学期末テスト 3位
舞鶴中3年 Bさん	31位	10月ドリカム 14位
国分中3年 Cさん	20位	10月ドリカム 13位
隼人中3年 Dさん	86位	10月ドリカム 47位

※2学期末テストの順位が未発表の中学校は掲載しておりません。(12月1日現在)

※上記以外の多くの生徒も“自分の一番(過去最高の順位)”を更新しました。

「勉強ができるようになる、頭がよくなる、そして心が豊かになる」という方法

読書・読字

脳科学の研究である脳科学の世界では、「脳と読書・読字には相関性がある」というのは常識だと言われています。日本語の場合、平仮名があつて片仮名があつて漢字があります。それで音と文字と意味がそれぞれ微妙にずれています。脳はこうしたずれがあればあるほどその複雑さに順応するために、高次の発達を遂げるのだそうです。ですから読書・読字の習慣を早めに身に着ければ、頭脳が発達する、頭がよくなるというわけです。もちろん読書・読字の習慣の効果はそれだけではありません。

「読書は、人生の全てが、決して単純でないことを教えてくれました。私たちは、複雑さに耐えて生きていかなければならないこと。人と人との関係においても。国と国の関係においても。」

これは、美智子上皇后のことばです。様々な書物を読むことで、未知の世界や文化、考えを異にする人々を理解することができます。これが、バランスの取れた思考を育て私たちの心を豊かにする、ということではないでしょうか。

本を読もう、世界を広げよう

『正欲』 朝井リョウ (新潮文庫)



十数年前、息子に薦められて読んだ朝井リョウの「桐島、部活やめるってよ」、「何者」そしてこの「正欲」。彼の私たちに突き付けるテーマは重い。それは多様性を理解し、尊重し、そしてどこまで寛容できるのか。読者ひとり一人に切実な問題として迫ってくる。

『ひと』 小野寺史宣 (祥伝社文庫)



女手一人で僕を東京の私大に進ませてくれた母が急死した。僕はたったひとりになった。大学を中退しあてもない日々の中、近くの商店街の惣菜屋で、最後に残った五十円のコロッセを見知らぬお婆さんに譲ったことから、不思議な縁が生まれていく。